

「子どもと芸術教育の拠点づくり『やまがたこどもアトリエ』」事業

家や学校では得ることのできない多様な体験を地域の資源を活用したプログラムを通して提供する

まちづくり事業を中心に公益性の高い事業に取り組んできた「公益のふるさと創り鶴岡」では、いま、芸術を手がかりに地域の子どもたちに多くの体験を提供するプロジェクトを展開している。街中や郊外で実施されるさまざまなプログラムを通して、子どもたちは豊かな創造性を育み、地域への愛着を身につけていくに違いない。

自然、芸術、地域での社会体験を3本柱に地域の資源を活用したプログラムを展開

芸術の持つ力は計り知れない。それは単に個人の表現活動の域を越え、子どもの教育においても効果を発揮してきたし、最近では町おこしやコミュニティ再生の手法としても取り入れられている。山形県鶴岡市に拠点を置くNPO法人「公益のふるさと創り鶴岡」は、これまで民間レベルでの町づくり事業や青少年育成事業に力を注いできたが、新たに取り組み始めたのが、「子どもと芸術教育の拠点づくり『やまがたこどもアトリエ』」事業である。

この事業は、篤志家や家主から借り受けた市内の山王商店街にある店舗の一角と、郊外の金峯山の山麓にある空き家の2か所をアトリエとして、芸術教室はもとより、

自然観察や農業体験など、さまざまなプログラムを企画・実施していくもので、2013年3月にその活動がスタートした。

対象とする子どもは3歳～小学校6年生だが、メインは小学校低学年だという。プログラムの告知や参加者の募集は、主にフェイスブックを活用し、それを見た親が申し込む形を取っている。それができるのも、鶴岡市が位置する庄内地方はフェイスブックの普及率が高く、人口の約1割が利用しているという背景があつたこと。プログラムの実施は月2～4回で、各回の募集人員は親子15～20組(子どもだけの場合もある)、材料費が必要な場合を除き、参加費は原則無料である。

運営にあたるスタッフは、山形市にある東北芸術工科大学出身の3名のアーティストで、プログラムに応じてさまざまな分野から講師を招き、ほかのNPO法人や大学生ボランティアが手伝いに加わるというスタイルになっている。「自然、芸術、地域での社会体験がプログラムの3本柱」と話すのは、常務理事の阿部等さん。「ここには魅力的な自然、もの、場所、すばらしい技術を持った人間がいる。そうしたものに接する機会や楽しむ機会がないのもったいないこと。その恩恵を実感できるようなプログラ



地元の大工さんの話を聞きながらイーゼルとスツールを制作



農家の女性を招いて庄内柿で干し柿づくり



造形作家の犬飼さんと一緒に浜辺に落ちていたものでオブジェを制作。さらにその作品展も開催した

ムを企画し、実施することで、子どもたちに地域に対する愛着を持ってもらいたいのです」と、運営スタッフの一人、結城ななせさんは事業の目的について話す。

表現という遊びを通して観察力や洞察力を身につけることで発見や発想につなげていく

これまでに実施されたプログラムのほんの一例を紹介すると、まず郊外のアトリエを活用したもので、地元の大工さんを講師に招いて、木材の性質について話を聞いたり、間伐材を使ってイーゼルとスツールを作る「森林プログラム」、若い農家の女性に協力を得て干し柿を作ったり、ヤギと触れ合い、それを粘土細工で表現する「農業プログラム」などがある。また、大先達の山伏に導かれて羽

担当者より



助成のおかげで切実な問題をクリアできました

公益のふるさと創り鶴岡
やまがたこどもアトリエ
芸術専門指導員
結城ななせさん

郊外のアトリエは子どもたちが走り回ったら壊れるのではないかと心配でしたが、助成をいただいたおかげで屋根や床板の改修ができ、本当に助かりました。子どもたちが地域の魅力に自覚的になることがコミュニティの再生にも役立つと思いますので、今後も幅広い職業や年齢層の方々と一緒に活動を継続していきたいと思っています。

黒山を歩く「親子山伏修行体験」などは、まさに庄内ならではのプログラムと言えるだろう。

商店街の店舗の一角を活用したもので、地域の中高年の方々から礼儀や慣習、昔の遊びなどを聞く「だかしや楽校」、お蕎麦屋さん、お菓子屋さん、ろうそく屋さん、映画館の場内アナウンス係や販売店員などの職業体験をしたり、アーティストや芸術系大学の大学生を講師として招いて造形美術を楽しむ「やまがたアフタースクール」、山王商店街で5～10月の第3土曜日に開催される「山王ナイトパザール」での「路上だかしや楽校」などがある。だかしや楽校は、この事業が始まる前からすでに10年以上の実績がある。

「子どもたちは本当に興味の幅が広く、創造的で、ものごとを楽しむ天才。自分を思いっきり表現できる場所として2つのアトリエを機能させていきたい。芸術はひとつのきっかけですが、芸術作品を作るのが目的ではなく、遊びの中でものごとをよく観察したり、分解して再構築することで仕組みを知ったり、読み解く力をつけてもらうことが目的です。それが子どもたちの成長過程において、さまざまな発見や豊かな発想につながっていくと思います」と、結城さんは話す。他市町村や地域からの相談や出張要請も増えつつあるということで、芸術を仲介とした幼児教育のひとつのモデルとなることを期待したい。